



青島の風

青島日本人学校だより
平成29年7月21日
校長 金森 孝子

それぞれの夏を有意義に

一学期の終業式が終わり、いよいよ23日間の夏休みが始まります。進級した子どもたちは4月12日、入学した子どもたちは4月13日からの約三か月、それぞれの学級に所属しながら、日々学習や集団生活を積み上げ、しっかりと力を付けてきました。その間、学校運営理事会、保護者、日本人会の皆様には、教育活動へのご理解とご協力、多くのご支援をいただきました。無事、事故なく一学期の教育活動を終了することができましたことを、改めて感謝する次第です。

さて、本日、担任から子どもたち一人一人へ言葉をかけながら「あゆみ」を手渡しました。一学期の学習の状況や様子を記しているこの通知表は、子どもたちの力を引き出し、伸ばしたいと考えている、すべての教員の思いや願いの結晶です。ぜひ、ご家庭でも、お子さんの良いところは大いに誉めていただき、また、伸び悩んだところについては、お子さんを励ましなが



ら、夏休みの過ごし方、学習の取組の工夫などの参考にしていただきたいと思ひます。夏休みは、子どもたちを大きく成長させる期間です。めあてをしっかりと立てて、普段継続した取組が難しい学習、読書、体力づくりなどにも取り組み、計画したことを大いに楽しみ、連携して、子どもたちにとって有意義かつ価値ある夏休みにしていきましょう。

青島に来て約三か月が経ち、学校運営の他、今、私が最も興味を抱いていることは「中国語」です。「中国語で書かれている絵本を音読し、子どもたちに読み聞かせをする」というめあてを達成するために、この夏は、中国語の学習にいそしみたいと思ひます。有言実行、素晴らしい子どもたちと共に、私も成長したいと考えています。

読書週間

図書主任 小和田恭子

6月26日(月)～30日(金)は、本校の読書週間でした。図書委員の児童生徒は、「みんなが行きたい図書室をつくる」という目標で日々活動をしています。そこで、今回の読書週間では、毎日学校図書館を開放し、スタンプラリーや図書館クイズを作り、多くの児童生徒に学校図書館へ足を運んで貰えるよう働きかけました。そのかいあって、いつもより多くの児童生徒が図書館に来ていました。イラストコンクールでは、50枚以上の応募があり、その中から9枚が入賞しました。また、読書期間中の朝活動は、中学部は毎朝読書を、小学部はファンタイムが無い火曜・木曜は読書や担任の読み聞かせがありました。普段じっくり本を読む機会が少ない中、朝からゆっくと本の世界を楽しむことが出来ました。

次回の読書週間は、3学期です。今回の反省点等を生かしなが

ら、多くの児童・生徒に気軽に来もらえる図書館を目指していきます。本校の図書館は、蔵書数と図書館施設としては、他の日本人学校からはうらやましが

られるほど充実したものです。その施設を最大限活用してもらおうと日々頑張っている6人の図書委員会が、全体の読書活動を盛り上げています。



体カテスト・持久走の取り組み

体育主任 鹿野 誠一郎

毎年、春と秋に実施している体カテストです。今年は、4月の後半にどの学年も実施しました。

体カテストを行う目的は、学校教育・家庭教育・環境・時代の変化などの要因が、児童生徒の運動能力・体力に対してどう影響を与えたのかを計測し、より改善するための方法を模索するための資料として活用するためです。

本校でも、児童生徒の体力の現状を把握し、バランスのとれた体の育成のためにデータを活用しています。一部ですが、全国平均と比較してみますと、どの学年も握力（握る力）・ボール投げ（投げる力）・長座体前屈（柔軟性）に課題がありました。この結果から、日ごろの体育の学習の中に積極的に取り入れながら、児童生徒の体力向上に向けて取り組もうと思っています。



また、柔軟性は怪我の防止に役立つことから、体育学習に積極的に取り入れています。ご家庭でもストレッチとしてご一緒に取り組んでいただき、児童生徒が体力向上にむけ、意識を持って取り組んでほしいと思います。

6月の半ばに行われた持久走記録会は、全学年行うことができました。持久走といいますと、冬場の体力づくりとして、日本でお行

われています。ここ中国（青島）では、空気の関係で冬場は外に出る機会が減るためこの6月の時期に実施しています。

小学部1・2年生は約1000m、3・4年生は約1500m、5・6年生は約2500m、中学部男子は約4000m、女子は約3000mの距離を各自の目標記録に向けて走りました。記録会当日は各学年とも、保護者の応援もあり日頃の練習以上の走りを見せてくれました。「苦しいから歩こうかな」の気持ちと闘いながら走りきった子もいたことでしょう。終わった後の目的を達成した喜びに満ちた児童生徒の顔が印象的でした。



現地理解を深めるために

研究・研修主任 富川 淳

本校の教育方針の一つに現地理解に努める子の育成を掲げています。これは、海外で生活する日本人の児童生徒に対し、日本国内と同等以上の教育を行うことの他に、将来、児童生徒が日本に帰国した時、または世界で活躍するために、豊かな国際性を身につけられるような教育を行うことも在外教育施設の大きな使命の一つになっているからです。

児童生徒に現地理解を深めるためには、7月号の記事にもありました外国語活動の充実があげられます。その地域の言葉を理解するためには、その文化から学ばなくてはなりません。例えばクリスマスやお正月についての表現を覚えるためには、まずその国でどのようにその行事が行われているかを知る必要があるからです。まさに外国語活動では言葉を通して、その国の文化を理解することにつながっていきます。

児童生徒が、実際にそこに住む異なる文化を持った人々と、交流を通して自ら実感し、疑問に思ったことをさらに追求していくことで理解は深まっていくのだと思います。

今日、ますますのグローバル化が進む中、そのような力を育てるためには、教師もより一層の現地理解に務め、児童生徒に豊かな国際性を育てていきたいと思っています。

